檀一雄全集——第七卷

太宰治
坂口安吾

雄全集 Ⅶ

新潮社版

檀一雄全集

第七巻

© Yosoko Dan, Printed in Japan, 1977.

印刷　1977年10月20日
発行　1977年10月25日
著者　檀 一雄（だんかずお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
電話東京 266 - (業務) 5111 (編集) 5411
振替東京 4 - 808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社

目次

小説　太宰治　7
小説　坂口安吾　117
小説　林芙美子　151
敗北者　167
長恨歌　191
熱風　219
小人閑居　231
ザボンの家　245

梨花 257
死んでも喇叭 271
幼年 297
帰去来 307
母 315
私の家に来た天女 327
解題 346

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

檀一雄全集

第七巻

小説 太宰治・小説 坂口安吾他

小説 太宰 治

まえがき

太宰治の死の原因を考えていって、私は疑いもなく、彼の文芸の抽象的な完遂の為であると思った。文芸の壮図の成就である。彼の死を伝え聞いた総ての人々が、その事情を察知し感得しながら、さて、その死を語る際になると、日頃見聞に馴れた世上の自殺風を附会していった。

太宰の死は、四十年の歳月の永きに亙って、企図され、仮構され、誘導されていった彼の生、つまる処彼の文芸が、終局に於て彼を招くものであった。太宰の完遂しなければならない文芸が、太宰の身を喰うたのである。

ただ、人々は、文芸の完遂の為に死を選ぶということを咄嗟に首肯しながら、おのれの市井風の身上に紛れ考えていって、その断定をためらった。

仮構された抽象的な生の完遂の為に、人は果して死を選び得るか？　ここに、疑いつつも芸術の至上を選び踏まえた、果敢な、太宰の純潔があるのである。その生の誘導が、正しかったか否かは、しばらく問うまい。その壮図が、彼流に申し分のない首尾を整えて達成されたことについて、私は太宰の為にひそかな祝盃を挙げれば足りる。

評者は屢々芥川の死と並べて云々するが、私の理解する範囲内に於て、太宰は遙に熾烈な功名心と、彼の文芸の温床であるところのその仮構された生の首尾を全うしたいと祈求する、文芸完遂のはげしい悲願に迫いたてられていた。ゴルゴタへ急ぐふうの思い入れである。その発端の意志の当不当は別として彼の選びとった生の完遂に関して、驚くほど真摯誠実であった。

太宰は、それを、好んで義の為だと云っている。義の為とは何か？　疑いもなく、彼の完遂しなければならない文芸の謂に外ならぬ。亀井勝一郎氏は、太宰の死の原因を本人に問うならば「千々に乱れて」と照れくさそうに答えるだろうと語っている。この友誼に敦い批評家は、情景を世

話物風に修飾して、切なく可憐ではあるが、私は肯けなかった。「父は義の為に死んだ」とはっきり云うだろう。いや、彼は死の寸前に至る迄、至るところで、そう言っているのである。

若し文芸家の生死の裁量が、女々しい井戸端会議風の興味につながり得るものなら、己の文芸に喰われて終うというようなむごい事実はおこるまい。太宰の場合は、文芸家のみが選び得る、このような厳粛な自己完遂の死であった。

彼の自己完遂の為の死は、早く十三年前に決定していたと云えるだろう。前の自殺未遂の折のこと、中村地平氏はその少し先の夜、太宰と娼家に同行して、彼がサックを使用していたことを思いうかべながら、おそらく自殺は狂言だろうと語っていたが、私は肯かなかった。

太宰が「狂言の神」と記すのは、彼の人生が仮構されているという意識上の自負であって、その故にこそ、死も亦壮烈に選び取られねばならなかった。

彼の仮構された人生は、死を選ばねば完成されぬ。彼の文芸は、彼の自殺をまたねば成就を見ない。太宰は早くから、このような執拗な妄想にのみ生きていた。「爾の為す事を速かに為せ」と彼が聖書に異常な関心を寄せていたのは、キリストの生涯に、恐しい符合と先駆を見て、震撼されていたからである。

然しその死の時期の選定については、太宰は最も世俗的な判定の規準に鋭敏であり、果断であった。己を知るものと云うべきであろう。従って彼の結核が既に決定的な段階に入ったという自覚、彼の世評がほぼ高潮に達しているという安堵と危険、太田静子の懐妊、山崎富栄との不決断な交渉（この何れの場合も恋ではない、彼のような虚栄の男に恋愛が成立しない事を私はよく知っている）これらの均衡を見渡して、選ぶべき時期は今だと裁決しただろう。そうしてこの時期に死を選べば、彼が最も憂慮していた妻子が、少くも餓える気づかいのないことをも、勿論のこと予想した。

太宰の死の直後、その夫人が雨洩りのする三和土（たたき）の上を跣足（はだし）になって洗い流していたという新聞記事は、私には一際哀切に思われた。太宰が生前、「息子の戦死を聞き、黙って背戸に出てシャッシャッと米をとぐ母」と語っていたことを思い合わせたからだ。

太宰の根柢はおそろしく古風な人情家であった。いや、人情に絶望しながら、人情の風儀にあこがれた。それは彼の家系の古さであると私は思っている。私は彼ほど人々に絶望しながら、人々に甘え媚びた男を知らない。これも良家の不良の子弟が、早く孤独を知って、我儘に甘え媚びる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

環境の故に相違ない。従って彼が心のうちで勝手に数えている重要な作家達は、暗黙のうちに彼を認知し支援してくれているという妄想を、早くから持っていた。佐藤春夫氏、川端康成氏、小林秀雄氏、志賀直哉氏等。これらの作家達が次々に彼に讃辞を呈するであろうことは、彼の疑いを入れぬ確信に迄達していた。だから、芥川賞の選定の辞に川端康成氏が、「私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて」という意味の言葉を見た時の失意と憤激は直に太宰を駆って「文芸通信」の異様な抗議となって現れた。志賀直哉氏への抗議も、また同断であったろうと、私は想像する。

これらの失意の緩衝を得たく、豊島與志雄氏の理解に縋り、死の寸前迄、絶えず慰藉の泉を得ていただろう。戦後、坂口安吾氏、石川淳氏らと並び称されていたことは幸福であった。即ち安吾氏の健康濶達の良識を喜び、更に淳氏の孤独な文化継承の雅懐を見て、ひそかに千万の援兵を得ていたに相違ない。

太宰治の異様な仮構人生と文芸を、外部から終始、正常な作家生活の軌道に乗せてやりたいと苦慮しつづけていたのは、井伏鱒二氏であった。氏の庇護なくば、太宰の死は、おそらく十年昔に訪れていたに相違ない。この庇護による延命の途上「富嶽百景」等の一連の不思議な開花を見せている。然し結局に於て太宰は、彼の仮構人生を完遂しなければならなかった。「春の盗賊」を見たまえ。洒脱剽軽に語られている彼の市井生活の底流に、不気味な、陰惨な、彼の自己完遂の決意と鬼火が燃えているではないか。

太宰は平常「文章を井伏鱒二氏に、文人の風を佐藤春夫氏に学んだ」と語るのを常とした。

太宰が死の瞬間に破棄していたという遺書の断片の文字は、井伏氏のかかる懇篤な庇護にもかかわらず、一部の心情を吐露したものだろう。私は、そこに、作家と作家との間に醸成されてゆく抜きがたい憂鬱を見る。

太宰はこのようにして、総ての処世の言を妥当なものと認定しながらも斥け、彼の文芸完遂の悲劇的な運命の側に立ち、専ら脆弱未熟の青年の讃辞を周囲に集めながら、その宴席の中で、今様兼好のように故実を語り、人情の風儀を語り、また今様キリストのように、近く十字架に急ぐ己の文芸完遂の決意を語りつづけていた。

こんな小説を書くことになろうとは――などと神妙な顔をでもして云ったならば、きっと太宰が噴きだすだろう。
「いや、書くだろう。俺が死んだら、きっと、書くに違いないと思っていたよ。嫌だね――ぞっとするね」
だから、私は気が楽だ。到頭、その時節という奴が、到来したわけだ。私は、妄動の悪徳を、遂に押えきれぬのである。

向うから、その男がやってきた。ハンチングを斜めに冠り、二重まわしの袖をマントのふうにそよがせて、「ヤ、先日は」
「僕んとこ?」と古谷は云った。すぐ側の、古谷の自宅を訪ねてくる途中かという意味だ。
「でもいいんだ。出かけるとこだろう?」
と、その男はハンチングの庇に手をやったまま、しばらく頬を染めるようである。出かけるところに、訪ねて来た。それを自分の負目に転化するふうの素早い苦悶。
瞬間私は、秀抜な写楽の似顔絵を見るようだった。
「うん、済まないけど、ちょっと出かけるとこなんだ。檀さん、紹介しよう。こっち、ほら、太宰さん」指さされて、男はハッキリとハンチングを脱ぎとった。油の切れた蓬髪が叩頭につれてパラリとかぶる。
「ダ、ザ、イです」
「こっち、檀さん」
「檀です」
「じゃ、又」と太宰は云った。古谷は気の毒そうにためらって、
「明日にも、出直して来ない? 今日ちょっと約束があるんで」
「いいんだ。いいんだ」と太宰は、それを甘く揉み消すように、くるりと後がえり、それから歩いていった。背丈は五尺七寸ぐらいか。
心持猫背の長身が、いわば憂愁に耐えるふうに歩み過ぎた。
昭和八年の、何月のことだったか、今思いおこせない。私が古谷綱武と知合になってから、ようやく十日目ぐらいのことだったろう。
実は、古谷にすすめられて太宰の作品を、二つだけ読んでいた。
作品は「魚服記」と「思ひ出」の二篇である。「魚服記」は「海豹」に載ったもの。「思ひ出」は同じく「海豹」に

分載されたものを切取って厚紙で表紙をつけ、それに少女雑誌の挿絵風に可憐な薔薇が一輪描かれてあった。

不思議である。その薔薇の一輪描かれた厚紙の表紙のことを考えると今以て全く不思議である。まさか古谷夫人がこんなことをまでして保管していた筈はない。又、古谷その人でもない。とすると、太宰である。或いは太宰のところの初代さんだ。後に「晩年」出版の折、大きな原稿入の封筒の中に入れられて、この厚表紙の「思ひ出」がやっぱりあったから、古谷が太宰から借りていたものにまちがいないようだ。

古谷はこの「思ひ出」と「魚服記」、それから尾崎一雄の「暢気眼鏡」木山捷平の「父の手紙」中村地平の「木つつき」中谷孝雄の「雑草」浅見淵の「コップ酒」長崎謙次郎の「雷霆」大鹿卓の「蕃婦」、これだけを私に是非読んで見よ、と云っていた。

みなそれぞれ面白いものだったが、別して私は太宰の作品に心惹かれた。作為された肉感が明滅するふうのやるせない抒情人生だ。文体に肉感がのめりこんでしまっている。

「太宰に会いたいんだけど」と私は躊躇なく古谷に云った。

「ああ、才能は素晴しいが、ちょっとつき合いにくい処のある人だよ。そのうちきっと又来るよ」古谷がその時云ったように記憶する。

それから四五日が過ぎた。私は大抵毎日古谷の家に遊びにいって、夜は酒を馳走になるならわしだったが、心待ちの太宰はそのまま来ないようだった。

が、ある日。未だ自宅に寝ているところへ、古谷の家の女中さんがやって来た。

「檀さん。太宰さんが見えてます。すぐ来て下さいね」

出かけていった。二階の古谷の居間に入ってゆく。太宰と古谷は将棋をさしている。私はこんな遊びは全く知らないから、しばらくぼんやりと見ているうちに、

「あ、負けたね」そう云って、太宰は指先から将棋の持駒をパラパラと盤の上にこぼしはじめた。

「まだ、負けてないよ。金の下へ下れるじゃないか」

「いや、負けた」

「そう」

古谷は笑って、肯いている。太宰の方は妙に脆い、素直な負け方のようだった。それとも来客の私の方へ気兼ねでもしたものか。

「太宰くん。こないだの小説読んでみた？」

古谷は私の「此家の性格」を太宰に読ませたようだった。

「いいもんだ。随分、いいもんだ。井伏さんも賞めていたよ」

「そう、檀さんがまた、君の小説を馬鹿に賞めている」
古谷の声にしばらく太宰はドギマギしたようだった。それをたてなおしでもするように、
「ヒドイもんだ。薬は、ねえ。歯が痛くっちゃ、やり切れないからアスピリンを飲んでいたら、あれは、耳が聞えなくなってきて、眼が黄疸になるんだね。ヒドイもんだ、四五日寝たよ。古谷君。君も気をつけた方がいいよ。アスピリンは」
「何錠、飲んだの？」
「ウ……ウン」とちょっと微苦笑のようにためらって、
「一箱だ」
「当り前さ。良く死ななかったよ、君は」
「そうかねえ。そんなもんかね」
この人は、平常自分を戯画化するならわしか。特徴のある含羞の表情でそう笑った。
が、酒は豪酒のようだった。額ににじんでくる汗を大きな麻のハンケチで拭って飲んだ。脂がうく顔で、鼻が馬鹿に大きかった。声はよく響く。
少し乱れると胸毛が見えていた。アイヌの族である。いや、ロシヤ人のようだった。
煙草をパッパッとやたらにけぶす。それを灰皿の上で、ていねいにヒネリつぶす。然し眼は何処か夢見るふうだった。
「良かったら、いつか遊びにやって来ない。古谷君と」と、その顔がためらって、
「何処です？」私が訊くと、ようやく心が安定したとでもいうふうに、感じのある地図をサラサラ描き、
飛島方　太宰治
「ここです。間借りでね。古谷君も一緒に来ない？」
「ああ、でも、こっちへおいでよ。こっちは二人なんだから」
「ああ、来る。じゃ」という太宰に続いて私も古谷の家の階段を降りていった。玄関で古谷と別れた。表に出る。ちょっと物足りなそうな太宰の表情が、宙を迷って、「じゃ」
そこで、二人は別れていった。生憎私も金の持ち合わせが全く無かった。特徴のある、例の猫背のトンビ姿が、向うの方へ消えていった。
私は一度家に帰ったものの落着けなかった。更めて、「魚服記」と「思ひ出」を読み直した。耐えている文脈が、甘美で、不吉だ。
追いかけようと決心した。地図に頼った。東中野から荻窪にゆき、荻窪の、その寿司屋と地図にしるされている辺りから折れこんで、飛島家を尋ねあてた。地図の通り裏庭の木戸から入る。
かなりの広さだ。案内を乞うと、色の白い東北系の美人が出て、下から大声の方言で二階と呼び合った。階上も女

の声である。
やがて眼鏡をかけた女の人が降りてきて、「どなたですか」
「檀です」
というと、二階にとりついで、又降りてきた。夫人に相違ない。
「どうぞ」
私は階上に上っていった。
丁度日没間際のようだった。二間である。こちらは居間に相違ない。極めて小さい、真四角の緑色の火鉢に太宰は手をかざしていたが、私を見付けると、意外だというふうに、然し微笑が押え切れず、
「ここが、いいんだ」
窓に近い方へ火鉢をずらせながら、夫人の敷いてくれた座布団の位置を換えさせた。
灯りをつけない。表情がよく見えなかったが、私は落着いた。小さい火鉢に炭火がカンカンおこされていた。
太宰が何か眼くばせすると、夫人は階上から大声で下の夫人に話しかけた。はげしい東北弁で、私には通じない。最後に太宰が一声、やっぱり私には通じぬ訛りで声を上げると、交渉は終ったようだった。
夫人が階段のところまでいって、一升瓶を提げてきた。それを徳利に移し夫人は鉄瓶の中にぬくめている。
鮭罐が丼の中にあけられた。太宰はその上に無闇と味の素を振りかけている。
「僕がね、絶対、確信を持てるのは味の素だけなんだ」
クスリと笑い声が波立った。笑うと眉毛の尻がはげしく下る。
「飲まない？」
私は盃を受けた。夫人が、料理にでも立つふうで、階段を降りていった。
「君は——」
と、私はそれでも、一度口ごもって、然し思い切って、口にした。
「天才ですよ。沢山書いて欲しいな」
太宰は暫時身もだえるふうだった。しばらくシンと黙っている。やがて、全身を投擲でもするふうに、「書く」
私も照れくさくて、ヤケクソのように飲んだ。
人はキザだと云うだろうか。然し私は今でもその日の出来事をなつかしく回顧出来るのである。
ここで私は、この作品を書き継いでゆく上の方法を明瞭にしておこう。私は私達の暗い交友を、今、文筆の上に再現出来ようとは思わない。殊に太宰は死んで終っている。
私は故人に対して大きな責任を負うだろう。という事は、

太宰が描いた全作品が、この未熟な私の文章に対して激しい抗議を示すだろう。

太宰は太宰の生涯を完璧に描いてしまっている。死を以て完遂された文芸を前に、より豊富な幻影を、太宰の亡んでしまった肉体を附与し得るであろうか？　はかない慰戯に近いだろう。

ともあれ、人生を誘導するという至難の事業に対して、与えられた生命と、自覚と、岐路と、蹉跌と、その育成の様相を私流に回顧するだけだ。

その次に太宰家をたずねた所が、何処であったか、今私は思いおこせない。私の記憶の上では経堂病院の二階あたりではなかったかと考えたが、井伏さんの「十年前頃」という記録を読んで、私の印象の排列に、大分錯乱があることに気がついた。

というのは肋膜という診断で太宰夫妻が（初代さんは勿論附添いという訳だ）入院した経堂病院の生活は、飛島氏の二階を間借りした前のことだと、井伏さんの文章に見えている。更に、入院生活の前は北さんの家の間借り生活をしていたと明記されている。

ところで私は、初代さんから、

「津島、随分ふとったでしょう？」

と、その病院で云われ、太宰の顔を、眺めなおしたことを妙にはっきりと覚えている。そう云われて馳走になった海老のカレーライスを、ああこの栄養料理のせいか、と思いながら喰べたからだった。

その時期は夏だった。いや、夏でないにせよ、冬でなかったことに間違いない。何か麦か、稲穂のようなものが病院の周り一面に黄色かった。いや、コスモスか。

二階の八畳間ぐらいの日本間だった。入院というより、夫妻でまるでアパートにでも住んでいるふうの風情だった。太宰はタオル地の寝巻を着てしきりにクスクスクスク笑っていた。太宰は見栄坊だから、前後を通じて性的に夫妻が自足しているような時期の感じを受けたことは一度もなかったが、この日だけが例外だ。

この時のことはどう考えても、私が、もう太宰とも初代さんとも、馴れてしまった後のことだった。とすると、私は北さんの家で太宰夫妻と初めて会っていなければならないことになる。私は北さんの家に行ったことも、勿論あるにはあったが、これは太宰と同道で、もう本人は北さんの家には住まってはいなかった。

私のおぼろ気な記憶に従えば経堂の入院生活は、阿佐ケ谷で行った盲腸手術の予後静養だったような気ばかりする。

そうして、それは飛島氏の家に太宰が越していった後の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.